

# 漢字学習における国別能力差

三 枝 令 子

## I. はじめに

筆者は、1985年4月から10月にかけて留学生教育センターにおいて『漢字圏の学生のための漢字クラス』を担当した。拙稿はそのクラスにおける学生の国別の漢字能力を分析・比較し、今後の漢字クラスのあり方を検討したものである。

## II. 授業の概要

上に述べた1985年4月からの学期に先がけて、1984年10月から現在（1986年2月）まで3学期に渡って筆者は中級の漢字クラスを担当した。詳述すれば84年10月から85年2月にかけての学期は、Cクラス（当時）の漢字の担当であった。<sup>注1)</sup> このクラスは、筑波大学の『日本語表現文型 中級Ⅰ』をメイン・テキストとするクラスで、漢字の授業は週に一回テキストに沿って、各課に出てくる新出漢字のうち22から30字選んで作られたプリントをもとに授業を進めるものであった。この時は、漢字圏と非漢字圏の学生とが一緒に同じ授業を受けることについて双方から不満が出され、問題だとする声が多かった。そこで次の85年4月からの学期ではC・D両コース（当時）全体で学生を漢字圏と非漢字圏とに分け、それぞれの学生のための漢字コースを試みに作った。そしてそれぞれのクラスの主教材とは関係なく独立して漢字の授業を行なった。筆者が担当した『漢字圏の学生のための漢字クラス』では、漢字の書き方は指導する必要がないだろうという前提に立って、同じ漢字圏であるがゆえに間違えやすいところの指摘に授業のねらいを置いた。<sup>注2)</sup> しかしクラスの選択は学生自身に任せただけで、当初教師の方で予想していた中国・台湾・韓国の学生だけではなく、実際には非漢字圏のアメリカ・エジプト等からの学生の出席も見られた。

## III. 漢字能力の分析

『漢字圏の学生のための漢字クラス』を試みに設けた85年4月から10月にかけての学期では、毎回授業のはじめに書き取りをした。これはもともとは漢字系の学生の拗音・濁音等の聞きとりの弱点を強化する目的ではじめたものであった。クイズの形式は、有意味でかつほとんどの学生が学習済と思われる単語を20、教師が2回ずつ読み上げ、学生はひら

がなと漢字両方を書くというものである。このクイズの結果は期せずして学生各人の漢字を書く力と読む力（厳密に言えばこの場合は聴解力ということにもなる）を示すことになった。

データとしてとった学生の総数は34である。12回行なったクイズのうち、はじめの2回はひらがなによる書き取りしか行なわなかったため、その2回の授業にしか出席しなかった学生の結果はデータに入れていない。学生のひらがなと漢字の書き取りの全体の平均は、かなが70、漢字が55で全体的には、漢字を書くより読む方が得意であることがわかる。なおこの数値は百分率である。先にも記したように本来このクイズは、学生の聞き取りの弱点を補う目的ではじめたものなので、かなだけ書けばよいという単語もいくつかある。例：げた、てんぷら。このため漢字を書く方は、満点がいつも出題数とは同じにならないので百分率によって結果を出した。

漢字とかなの相関係数は0.63で5%レベルで有意であった。すなわち漢字が書ける人は読む方もできるということになる。

表1 全学生の漢字とかなの相関

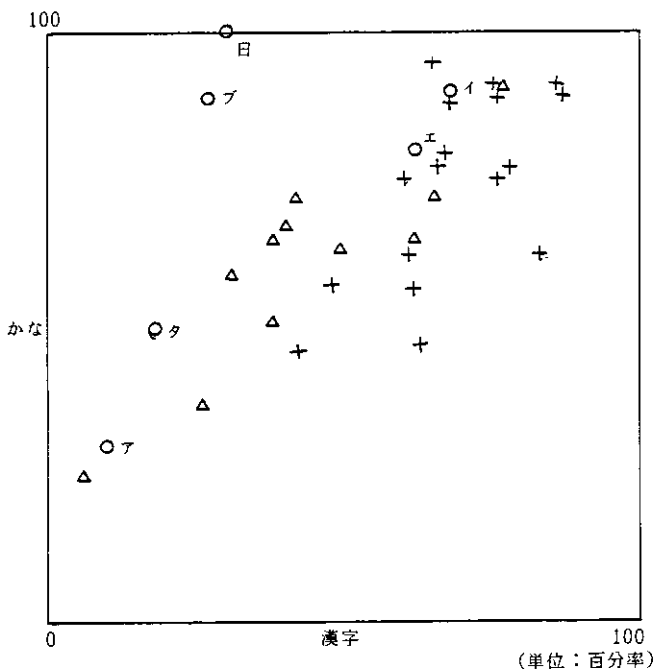
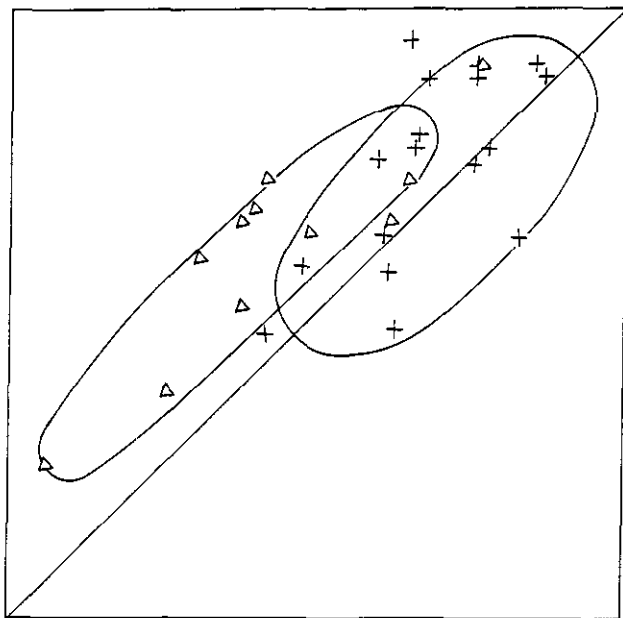


表1は、34人のクイズ結果の漢字とかなの平均をそれぞれX軸とY軸にとった相関のグラフである。なおグラフ上に点となって表わされる各データは更に、+、△、○によってそれぞれ中国・台湾（中国1名台湾16名計17名）、韓国（11名）、それ以外（6名）に分けた。それ以外を示す○印の学生の右の文字、日・ブ・イ・エ・タ・アはそれぞれ日本・ブラジル・イタリア・エジプト・タイ・アメリカの学生であることを示している。この表1から次のようなことが言える。

1. 中国・台湾の学生は読み書きともすぐれている。表2（見やすいように表1から台湾・韓国以外の学生のデータを除いたもの）を見て明らかなように、台湾の学生は右上方に、韓国の学生はそれよりはずっと左下方にかたまっていることがわかる。

表2 中国・台湾と韓国の学生の  
漢字とかなの相関



2. 台湾の学生が読み書きともすぐれているのに対して、韓国の学生は書くよりは読む方ができる。しかしその能力は全体としては台湾の学生より低い（表3参照）。

表3 中国・台湾と韓国の平均の比較

	か	な	漢	字	全体平均
中国・台湾	74		69		71
韓国	61		43		52

(単位：百分率)

3. 非漢字圏の学生のデータは少ないが、ここで見る限り漢字の読みの方が書くよりはできることがわかる。

4. かなが全部できた日本人の学生は帰国子女である。データは一つであるが、今後増加するであろう帰国子女の漢字力を示しているように思われる。ちなみにブラジルの学生も日系である。

5. イギリス・エジプトの学生とも非漢字圏ながら台湾の学生に匹敵する漢字力を示している。漢字学習の到達度は所詮本人の努力次第ということであろう。このイギリスの学生は、国の大学では中国語を専攻していた。

ついでながら既習の漢字学習数(学期のはじめにDコースではアンケートがなされた。)と今回のクイズ結果には関係が認められなかった。「漢字がどのくらい書けますか。」と聞かれても正確に思い出せるものでもなく、中には実際「数えたことはない。」という回答もかなり見られた。学生にこのような質問をしても参考にはならないということであろう。また、理科系の学生と文科系の学生とで漢字力に差があるかもみたが、相関をとるまでもなく両者に関係は認められなかった。

#### IV. まとめと提案

以上、試みとしてはじめた『漢字圏の学生のための漢字クラス』の学生の、漢字能力の分析を行なった。結論としては、台湾・中国と韓国の学生との間には漢字力に大きな差があり、両者を一緒にした時点ですでに『漢字圏の漢字クラス』というものは成立しえなくなるといえる。

1985年春からのこの学期は、授業の名称に従って日本語と中国語の熟語の意味の違いなども取り上げた。これは台湾の学生には喜ばれたが、非漢字圏の学生の中には、「自分達

には意味がない」と不満を言う者もあった。実際クイズの結果をみても、このクラスで台湾に照準を合わせた授業をすることは適切とはいえなかった。もし中国・台湾の学生で独立して一つのクラスを作ることができるならば、それは充分意味のある授業となろう。もちろんこの場合には教師の中国語力も不可欠である。

この後の1985年秋からの学期では、漢字圏・非漢字圏ということには顧慮せず、ある程度漢字ができるものとほとんどできないという基準で学生を二つのクラスに分け、筆者が担当した既習組の方は、『よく使われる新聞の漢字と熟語』<sup>注3)</sup>をテキストに、クイズを毎回行なうことによって、漢字学習の動機付けをいくらかでも与えるという方針の授業を行なった。しかし率直に言ってこのような形式での授業には、もはや教師が教室で行なう意味をほとんど認めがたかった。基本的には漢字は繰り返し自分で覚えていかなければならないものであり、また各自の学習程度・問題点は各人各様であるので、早晚漢字の学習は大部分コンピューターに任されることになるのではないかと考えられる。

#### 注

- 1) 2) この2つの授業の詳しい内容については、『日本語授業研究 1985』 東京外国語大学日本語教授法資料 1986年秋発行予定 を参照。
- 3) 『よく使われる新聞の漢字と熟語』 豊田豊子 1984 凡人社